

明治大学教授

西川伸一さん 大学教育で進む 「英語偏重」の実情



写真：西川伸一さん 大学研究室で

——先日は、塾長を務めていただいている友愛政治塾の年頭での第一回講座で「自民党の特徴と安倍政権」をテーマに講義していただき、ありがとうございました。塾生の反応はよかったです。二月になり、森友学園問題が急浮上して政局が揺らいでいますが、まず一言ありますか。

西川 あの話義のレジュメをまとめながら、理論的一貫性よりも政権維持のために妥協する自民党の特質がいつそうはつきりと浮かび上がりました。選挙制度が小選挙区制に改悪されたことによって、自民党内の派閥が衰退し、党執行部の独裁的党運営が常態となり、「反主流派」はもう死語です。以前は党内の議論ももっと活発に展開されていたのですが、何が起きても執行部の方針に異論を唱える人はほとんどいなくなりました。村岡さんの言う「歪曲民主政」の極致です。今度の森友学園問題でも安倍昭恵夫人の責任を問う声は石破茂元幹事長くらいです。「付度」が *soutaku* と外国の新聞に書かれるほどに流行語になっていますが、まさに「付度政治」に堕していると思います。最高裁判所裁判官の人事までが、安倍晋三首相の意向を付度して左右されています。これでは三権分立の根本的原則すら危うくなっています。

——塾で西川さんの『オーウェル「動物農場」の政治学』（ログス）を買っていった人から、「まさにオーウェルの描いた様相が今の日本に当てはまる」という声が届きました。この著作はログスのロングセラーになっています。

「軍法務官」の研究

——今、研究しているテーマは何ですか？

西川 「軍法務官」について調べています。戦前には軍隊のなかに、兵隊が起こすさまざまなトラブル、一般社会では犯罪とされる行為を裁くために、軍法会議が設置されていました。正確に言えば、軍法会議には、常設軍法会議と特設軍法会議があり、前者の上告審として高等軍法会議が置かれていました。常設軍法会議は陸軍と海軍にそれぞれ設置され、武官である判士四人と一人の文官で構成されていました。この文官を軍法務官と言います。特設軍法会議では判士二人と軍法務官一人でもよかったです。

なぜ軍法会議が設置されたかといえば、軍隊内部の「法治」を確保するためです。兵隊同士のトラブルだけではなく、海外に出かけて、地元住民とのトラブルも起きます。それを法律によって裁くためです。軍法会議はこの師団

や鎮守府にも軍艦内にも侵略した外国にも設置されていきました。艦長の一存で処理するわけにはいきません。まさに「社会あるところに法あり」です。法律の知識があまりない軍人だけでは量刑を下す「裁判」になりませんから、法律の専門知識を備えた軍法務官が必要だったので。中国や朝鮮に赴任した軍法務官には優秀なベテランが多かったです。

大正時代からの『官報』を丹念に調べると、軍法務官の任命などの記録が載っていますから、その実態を掴むことがある程度できます。三年前に「戦前期日本の軍法務官の実体的研究——軍法務官193人の実名とその配属先をめぐって」としてまとめました。これは二・二六事件が起きた一九三六年までの中間報告です。その後敗戦までも調べていますが、まだ論文にできていません。

敗戦をまたいで、これらの軍法務官経験者は戦後の司法界でも大きな役割を果たしていました。最高裁判所判事になった人もいます。戦後司法の骨格の一部をなしているのです。彼らが書き残した日記などの記録には、軍隊が海外各地で乱暴狼藉を働き、非人道的な行為を重ねていたことが書かれている場合があります。軍人ではありませんから、軍隊とは距離を置いて観

察できたのかもしれませんが。

どこで知ったのか、軍法務官の遺族の方から自分の家に曾祖父が残した日記や資料がたくさんあるから閲覧してほしいというメールが届きました。まだ足を運んでいませんが、貴重な資料が見つかるかもしれません。

——日本政治学会でも活躍しているようです……

西川 日本政治学会は約一八〇〇人の政治学者で組織されている、七〇年近い伝統のある学会です。私は、昨年の総会で年に二度刊行される『年報政治学』の二〇一八年I号編集委員会の委員長に選任されました。それで司法についての特集はこれまでなかったもので、その特集タイトルを「政治と司法」としました。

日本の政治学者の間では、小選挙区制に反対する意見が大勢を占めています。選挙のあり方についてはいくつもの論文が書かれています。日本政治学会の理事長も務められた小林良彰先生の研究では、日本の有権者は候補者がやってきた業績を評価して投票する（業績投票と言います）のではなく、公約についてはこだわがなく、以前に投票した人が公約を破っても、次の選挙でもその人に投票する傾向が強いと指摘されています。これでは当選者も公約を軽視す

るわけです。政策や理屈ではなく、情に重きを置く傾向の現れでしょう。

『週刊金曜日』の政治コラム

——話は変わりますが、『週刊金曜日』の政治コラムを長く続けていますね。読者からの反応はどうですか。

西川 二〇一一年の3・11の東日本大震災の翌月から月に一度書いています。この三月で七三回になりました。反響についてはですが、残念ながらあまったくと言ってよいほど何もありません。ただ一度だけ二〇一四年の都知事選挙の時に、舛添要一候補に対して、宇都宮健児氏が立候補して脱原発をメインに掲げた細川護熙候補と分裂選挙になった時に、宇都宮氏は立候補を取り下げるようにという意見を書いた（一月二四日号）ら、読者の投書欄にいくつかの批判、反対意見が載りました。この一度だけです。二〇一三年一〇月に消費税の逆進性について疑問を呈した時、反論があるかと思っていましたが、何もありませんでした。一万人も読者がいるのに、積極性がなくなっているのかもしれない。ネットは見えていませんが、メールや手紙などはありません。編集者が「面白かった」と言ってくれる例はたまにあります。

それでも六年間も続いています。このコラム

は四人が順番に書いているのですが、今では私が一番古くから書いていることになりました。いわば「学者枠」で執筆に応じる人がいないのかもしれない。私の前任は山口二郎さんで、彼は一年つづけました。その前が一九九三年の創刊ぐらいの深津真澄さんです。他の三人はよく交替しています。

——編集部からの注文のようなことはあるのですか？

西川 それはありません。ただ一度、二〇一二年の八月に高校野球について「不健康きわまりない」と批判的な文章を書いたら、「野球の話だけだとちよつと違和感があります」と言われ、テーマを「領土問題」に変えたことがありました。「朝日新聞」ならいざ知らずと苦笑しました。けつこう気に入っていたのですが、二年後に少しアングルを変えて高校野球について批判的に書きました。校閲はしっかりしていて、うっかりしたミスを訂正されることはよくあります。月に一度、時局的な問題について頭を悩ますことも悪いことはありません。

——そんなに反響がないとはがっかりですね。投書欄をみても高年齢の人の投書が多いようですし、青年の政治参加の減退を反映し

ているのでしょうか。

英語偏重の傾向が加速

——今度の号の特集が教育問題なので、近年の大学の様子について特徴的なことがありますか？

西川 すぐに浮かぶのは、英語偏重の傾向が加速していることです。国際化とかグローバル化ということで、英語がそこではびこっています。大学に進学する高校生のなかでも国際化志向が強まっているようで、英語を使うことが優れていると思っているようです。私が勤務している明治大学では「世界へ」が合言葉になっています。英語での授業があることが宣伝ポイントになっています。英語だけの授業は「トップスクールセミナー」と命名されています。まるで私などがやっている授業は「ボトム」底であるかのようなのです。この名に惹かれて志願する高校生もいるわけです。

教員も英語を話せること、英語の論文を書くことが評価されるようになりました。今では明治大学の教員採用は「公募」が原則となっています。私が助手になった一九九〇年代とは違って、明治の教授の弟子が助手試験を受けるシステムとは異なります。ですから全国から応募

者が来るのですが、「英語で授業が出来ます」となれば、選考上有利になるのでしょうか。「グローバル人材」の育成は文科省の政策ですから、教員にも英語で論文を書くこと、海外の学会で英語で報告することが求められ、「英語帝国主義め」とごまめの歯ぎしりをしています。

また、明治の大学院の経済学専攻に入学してくる学生の九割は中国からの留学生です。ここ一〇年で大幅に増えました。

大学院の役割の一つは、後継の学者を育てることにあるのだと思います。日本人の学生が減って留学生が増えたと、彼らは修了後は帰国するわけですから、日本の大学院が日本人の研究者を育てていないことになります。国際化が必然だと言っても困った事態です。後継の研究者を育てられないのでは、大学院の存在理由が問われかねません。

留学生が増え、国際化が進むのと裏腹に、歴史・思想系の科目が軽視されています。幸い、私が所属する学部では「日本政治思想史」という科目は専任教員が担当していますが、とにかく歴史・思想系の科目を国際系の科目に置き換えることがトレンドのようになっています。

この傾向と軌を一にして、留学経験のある研究者が多くなり、欧米流の理論が盛んに取り入

西川伸一 著

城山三郎『官僚たちの夏』の政治学

—官僚制と政治のしくみ

第一章 人事カード
第二章 大臣秘書官
第三章 対立
第四章 登壇ランブ
第五章 権限争議
第六章 冬また冬
第七章 春そして秋
あとがき



城山三郎『官僚たちの夏』をベースに日本の官僚制の実態を浮き彫りにし政治のしくみを解明する。
プロローグ —『官僚たちの夏』と私

ISBN978-4-904350-35-5
C0031
2160円(税込)

オーウェル『動物農場』の政治学

小さな特権がいつの間にか大きな権力に
権力の横暴への歯止めはどこにあるか

G・オーウェルの慧眼をデコに

政治のからくりを縦横に透視する

目次
プロローグ 逆ユートピア小説は警告する
第一章 豚のメージャー爺さんの大演説
第二章 豚の特権階級化の芽生え
第三章 反革命を撃退する
第四章 ナポレオン独裁体制のはじまり
第五章 路線転換
第六章 反乱から大粛清へ
第七章 風車の完成、爆破、
第八章 そして辛うじての戦勝
第九章 ボクサー葬送
第十章 裏切られた革命

ISBN978-4-904350-15-7
C0031
1944円(税込)

ロゴス

TEL03-5840-8525 FAX03-5840-8544

れられています。論文の参考文献を見ても英語文献がきらびやかに載っています。学会でも英語のセッションがあつて、そこでは英語だけです。日本人が英語で報告して、日本人が英語で質問する。私には植民地的状況としか映りません。アメリカ帰りやイギリス帰りの研究者が多いなかで、日本語だけではできない私などは肩身が狭い思いです。私はクルマの運転免許は持っています。だからといって、それで引け目を感じたことはありません。同じスキルではない英語ができないだけで、なんでこんなに卑屈な気分にならないといけないのか。歯がみする毎日です。

— それでは日本の歴史や文学はどうなりますか？ 安倍晋三首相はさかんに「美しい国・日本」と叫んでいます。

西川 この英語偏重は文科省が推進しているのです。小学校の低学年から英語を教えるとか、英語教育を重視する学校を設置している自治体を「小学校英語教育特区」などに認定するとかです。漢字が書けないのに英語だけは話せるというような妙なことになります。

— この前、東大に勤めている本誌の読者と話していたら、学生相談が多くなつていて、法学部には学部だけの相談部署があるそうです。明治はどうですか。

西川 明治の場合には全学規模の学生相談室があります。学生が卒業に必要な単位が取れないとか、人生上の悩みがあるとかで相談に来ます。最近の傾向は、学生の悩みを学生の親が訴えて来る例が増えていることです。例えば「あの先生の授業は分らないと息子が言っている」

る」と親が事務室に電話してくる。自分で訴えることができないのかと思います。「親ばなれ」できない学生が増えています。親も「子ばなれ」できません。卒業式はもちろん会社の入社式にさえ親が同伴します。

— 後ろ向きの話が多くなりましたが、何か前向きの話題はありませんか。

西川 私事になりますが、さつき出た『オーウェル「動物農場」の政治学』の次に二年前に『城山三郎「官僚たちの夏」の政治学—官僚制と政治のしくみ』（ロゴス）を書きました。今年は第三弾として『内閣法制局長官のオーラル・ヒストリーを読む』を書き上げようと思います。

— ありがとうございます。

（にしかわ・しんいち／明治大学教授）
次回…糸数慶子さん（参議院議員）